



写真未着



榎木英介氏

近畿大学医学部病理学教室医学部講師
病理専門医、細胞診専門医

1971年横浜生まれ。95年東京大学理学部生物学科動物学専攻卒。同大学院博士課程中退後、神戸大学医学部医学科に学士編入学。2004年医師免許取得。06年博士(医学)。09年兵庫県赤穂市民病院勤務後、11年8月から現職。

生物学の研究者をあきらめて病理医に。研究者や医師の社会的問題の解決にも尽力したい

中学生のころに科学者になろうと決め、東京大学理学部生物学科に入りました。大学院に進学したものの、研究を論文にして成果を上げる厳しさに直面。博士課程で研究に行き詰まり、教授から研究室を辞めるように言われました。大学院を休学し、進路に悩んでいたとき、神戸大学医学部に医師免許を持つ研究者を育てるコースが新設されたのを知り、受験して合格しました。ただ、4年間で医学部の勉強と研究をするのは大変で、どちらもうまくいかなくなって。最初の研究室の教授から指導を渡され、別の研究室に移りました。自分は研究者に向かない、何かしらの研究はするにしても臨床に近いところに行こうと思うようになりましたね。

臨床研修で各科をローテーションした後、選択期間の3カ月間、病理医を経験し、これだと思いました。研究者のように未知なる世界に取り組むわけではないけれど、知識を活かして確定診断を担い、臨床医から頼りにされる。32歳で医者になるのだし、“ブルーオーシャン戦略”で人が足りない領域に行くべきだとも考えました。

2006年に神戸大学附属病院病理部に入局。2年後、上級医や先輩が辞めたために一時的に大学病院の常勤の病理医は私一人に

なりました。すぐ新しい教授が赴任しましたが、厳しい時期でした。09年、専門医取得前に赤穂市民病院にたった一人の病理医として赴任。ものすごく鍛えられました。毎日が不安で、明らかに良性的所見でも「ほんとに良性的か、誰でもいいから見て！ 犬でも猫でもいいから、そういって！」というような気持ちでした。週1日の大学病院での研修日には教授に何時間も私の診断を確認してもらいました。判断ミスに外科医が気づいてくれて大事に至らなかったこともあり。責任の重さ、怖さを感じ続けた2年間でした。

今の職場には大学で一緒に働いていた先生に誘われました。専門医試験に一回落ちたこともあり、多くの人に教えを請うことも必要だと思い決断しました。もし自分が今も理学部にいたら、助教にもなれなかったでしょう。病理医になって7年、専門医の資格も取れましたが、見る疾患は幅広いし、それぞれの最先端を追わないといけないので、勉強には終わりがありません。

若手研究者のキャリアや医師の過重労働などに対して発言したい

科学や医療の課題について世の中に発

信し、変えていくことも人生の目標です。大学院生時代に生化学の若い研究者の会に入り、研究者を取り巻く問題に気づきました。とくに大きいのが大学院重点化計画やポストク1万人計画のあおりを受けて職場を見つけれない研究者の増加です。自分も路頭に迷った一人ですし、科学や研究者の状況を伝えるためのNPO法人を03年に設立しました。その後、仲間内での意見の相違や、仕事での責任が重くなったことでNPO法人を退会し、仲間とともに、メルマガ発行や講演などで科学・技術政策の在り方を考える活動をしています。

11年には著書『博士漂流時代』が科学技術ジャーナリスト会議の科学ジャーナリスト賞を受賞しました。このときの審査員の一人が、理学部の大学院時代の指導教授で、「おめでとう！」と握手して下さり、わだかまりがなくなりました。感慨深かったですね。今では私を新たな世界に踏み出させてくれたことを心から感謝しています。

この本と受賞は活動の後押しになっています。ただ、問題提起はしても、社会を変えるまでには至っていない。本を書いた責任があるので、関わっていかないと。医師の過重労働や医師不足についても伝えたいと思っています。

生まれ変わっても、やっぱりドクター？

「医師になったのが遅かったこともあり、また医師になってもいいかな。科学者として誰も知らなかったことを明らかにするのもいい。あらためて考えてみると文句を言いつつも今の生き方に満足しているということか、と思ひ至りました」

文/小島あゆみ